

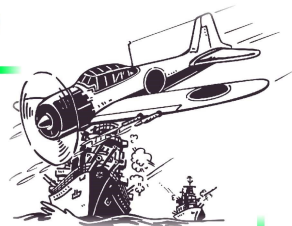


今月のことば 令和5年(2023) 7月 <No.203>

時代の要請

昭和16年(1941年)12月8日。日本軍の真珠湾攻撃によって、日米が開戦しました。その翌日、西本願寺の宗主(当時のご門主)が御消息を発布されます。(以下はその一部)

わが宗の門葉(真宗門徒のこと;住職註)、かねて今日あるを覚悟し、その用意に欠くるなきを信ずるも、しかもこの未曾有の大戦に際会して、その決意を強くする。もとより進んで**不惜身命**の実践なかるべからず。



…生死を超えて報恩の力行に邁進せんは、まことに本宗の本領とする所なり。いわんや国家の大変に際会し**身命を君国に捧ぐるは教徒の本懐これに過ぐるものなし。**

『十五年戦争下の西本願寺教団』神戸修 著 より

「**国のために命を捧げることこそが、真宗門徒のあるべき姿である。**」とご門主が宣言されている、今読むとショッキングな内容です。

しかし当時の資料を見ると、1931年の満州事変から1945年の敗戦まで、同じような内容の御消息や御親示・訓告や通達などが、ご門主や執行(本願寺の事務局)の名で繰り返し出されていました。つまり先の大戦の期間を通して、本願寺は率先して戦争協力(命を差し出すこと)を門徒方に呼びかけていたのです。(真宗門徒であった私の祖父も戦死しています)

浄土真宗の救いとは、真実信心をいただき、阿弥陀様の浄土でさとりのお仏に成ること・今が虚しく過ぎる命ではなくなり、生きる意味が与えられることの他にはありません。それを伝道すべき教団が、「国のために死ぬ」ことこそが真宗門徒の本懐(さらに言うなら阿弥陀様や親鸞聖人の御恩に報いること)であると、嘘を教えていました。

なぜ、そんなこと(嘘の伝道)ができたのか?・・・おそらくは国の存亡がかかる中、教団存続のために、「**時代の要請**」であった日本の皇国思想を受け入れるしかなかったのだと思います。ただ、門徒の命を差し出してまで存続する教団とは、いったい何なのでしょう。



以下は、本願寺を日本最大の教団に育て上げた8代宗主・蓮如上人の言葉です。

「一宗の繁昌と申すのは、人がたくさん集まり、威勢のさかんなことではない。一人であっても、まことの信を得ることが一宗の繁昌である。」

(『蓮如上人御一代記聞書』より)



今でも、宗教に対してさまざまな「**時代の要請**」があります。「宗教も社会貢献を」「心の救いよりも現実生活への救いを」「仏教用語は難解だからもっとわかりやすく」等々……。世間の常識からすれば、耳を傾けるべき大切な要請ばかりです。しかしその一方で、「**国に命を捧げる**」ことが常識だった時代があったことを考えると、常に浄土真宗のみ教えの根本に帰っていくことを、私たちは忘れてはならないと思います。



慧日山 真光寺